

## 不朽の名盤「第九」の思い出

僕には、これだけは手放せないと云える名曲名盤がある。

歴史的指揮者フルトベングラーがナチスに協力したとされた戦犯容疑から解かれ、折しもバイロイト音楽祭が再開、その聴衆を前に復活を果たし万感のタクトを振った一九五一年七月二九日の「ベートーベン交響曲第九番・合唱付き」実況録音盤（アナログからCD盤にしたもの）である。

巨匠の復活は、誰もが待ちに待った瞬間だったに相違ない。

音は極めて弱いPPPで始まる。その一音を命ずるフルトベングラーの微妙に揺れるタクトの先端を見つめて、オーケストラはもとより聴衆も息を殺し固唾を呑んで耳目をそばだてたという。彼の微妙なタクトの揺れは、やがて日本で「振ると面喰う」などと評され「フルヴェン」と呼ばれたそうである。

そうしたエピソードに触れて、僕もすっかり同じ気分で最初の一音に臨むようになった。その一瞬から微音が次第に力を得て行くくぐりは、何遍聴いても全身を耳にしたような緊張感を覚える。誰でもが身近に聴いてきたはずの名曲で、何を今さら、と思われそうだが、僕は手元の名盤を二十数年も聴く内、その場のイメージが沸くようになって、格別なものとなってしまった。

全楽章際立った特徴を盛ったような曲だが、僕は第三楽章が好きで、静かで気持ちの良いひとときには本当に心が休まる思いがする。

なお思い入れを強くする一因に、この名盤との出会いの思い出があった。

昔は定期的な演奏会の会員にもなって音楽には馴染んでいた

が、レコードからCDに変わった頃には、CD収集をするようにもなつて、その際に参考にした本があった。

「クラシック不滅の名盤一〇〇〇」という。

当時、次男の息子家族の子供（三歳）を預かって面倒をみていたところ、その孫娘が何故か決まって本棚から取り出してくる本があった。前述のものである。

本棚には、鳥類図鑑やら定期雑誌、小説など雑多な本が並んでいたが、幼い子の眼につくような背表紙でないにも関わらず、不思議とその本を持って来ては僕らに渡すのであった。

やがて、それがフルヴェンのベートーベン交響曲第九番との出会いとなった。以降、そこから得た知識で集めたCDは七、八十枚になるだろうか。